異聞逸聞

ヤマトと琉球のはざまで

前田 達朗（まえだ たつろう）　東京外国語大学准教授

二〇一四年の「春のセンバツ」、二一世紀枠で奄美の大島高校が出場した。その大会の優勝校の平安高校とぶつかり、破れはしたが中盤までは互角以上に渡りあった。一塁側のスタンドは異様な雰囲気だった。超満員のアルプスに入りきれず内外野両側にはみ出した応援団は、年齢層が高かった。奄美からの応援団はもちろん、関西在住の出身者が押し寄せたのだ。

与論から喜界島までの「有人六島」といわれる奄美群島は、行政上、鹿児島県に含まれる。一七世紀に薩摩が琉球に軍事侵攻し植民地化した名残である。支配は苛烈だった。薩摩の財政を支えた黒糖の原料のサトウキビのモノカルチャーを強いた。そのぶん食料の生産は制限され、簡単に飢饉（ききん）に陥った。借財がかさんだ農民は、債務奴隷「ヤンチュ（家人）」となる。ヤンチュ層は全人口の三割に達したという。薩摩が鹿児島になっても収奪の構造はかわらず、人びとは生きるために出稼ぎに出る。一九二〇年代をピークに朝鮮や沖縄からと同様に阪神工業地帯に廉価な労働力として奄美人はやってきて、戦後を通じていまも流れは途切れていない。そして出稼ぎ先での被差別経験と戦時中の皇民化政策が、沖縄と同じように奄美でも「本土」でも自分たちのことばや文化を消し去ることで「日本人」になることを求めた。一九五三年までの占領経験もこれに拍車をかける。今も奄美では個人宅でも日の丸や皇室の写真をよくみかける。群島の人口は二二万弱、関西在住の出身者は、一説には係累を含めて三〇万人いるといわれる。同郷会を作り、「二世」という言い方で出身者の子どもたちを呼ぶのも、朝鮮や沖縄の出身者と似ている。

甲子園の大島高校側のスタンド。アルプス席 4,000 は前売りで完売。春の大会の１回戦では極めてまれなことだという

その人たちがスタンドにそれぞれの「シマ（共同体の意）」への思いを持ち寄ったのだ。結局は大差がついたが、試合のあいだ、甲子園は確かに「シマ」だった。

では奄美は沖縄とともに同じ「琉球」なのか、と言われると返事に困るのである。言語や文化的には当然似通っているのだが、人びとは沖縄ではないと主張し続けている。沖縄の側からの目も冷めている。琉球かヤマトかという議論は的外れなのだろう。鹿児島の支配は続き、そのことを主張するには奄美の声はあまりにも小さい。「日本人」であることにすがるしかないのだ。

奄美の三味線は沖縄の三線（さんしん）と構造は一緒だが、琉球音階ではなく和音階で奏でられる。

奄美は奄美である、としか今のところは言いようがない。